

「熊本地震における避難所運営の教訓」

➤ 運営状況が良好だった避難所の例

- 自治会の方々が、避難所運営を主体的に実施していて、避難所の中での様々なルールを自分たちと担当職員で相談して決めていた。不自由な中にも、皆で協力し合っているという雰囲気ができていた。
- 行政職員に、避難者の健康状態や支援ニーズなどを適時適切に伝えていて、行政職員がそれに基づきテキパキと報告・連絡・調整をしていた。
- 支援ニーズは、よく相談して決めており、具体的かつ優先順位が付けられていたため、役所や医療支援団体、自衛隊等に要望が伝わりやすかった。
- 要介護者の面倒を、近所の方々と支援の保健師さんが協力してやっていた。
- 支援物資は必要な分だけ持っていくため、不足はほとんど発生していなかった。
- 身の回りの整理整頓・清掃は自発的に実施していたため、避難所全般に清潔感があった。
- 避難者は顔見知りばかりだということで、当初パーティションの要望が出なかった。
(仕切ると高齢者や要介護者の異変に気づかず、防犯上も不安とのこと)

➤ 運営がうまくいかなかった避難所の例

- △避難者が、お客さんのような振る舞いで、行政職員に何でもかんでも要求し、不平不満ばかりを訴える避難者もいた。避難所の雰囲気は良くなかった。
- △誰が避難所について誰が安否不明なのか自治会でも判らず、避難者名簿が完成しない。
(名簿に無い避難者が居て、名簿にある避難者が居ない。毎日避難者数が変動する。)
- △行政職員が一日中バタバタ動き回って多忙を極め、泣き出す女性職員もいた。
- △村全体の状況を考慮せず、当面必要の無い物などを要求したため、本当に必要な物が本部に伝わらなかった。
- △配食作業のほとんどを、全国の県市町村から支援に来た職員等に任せ、「食事の準備ができました」という放送とともに、避難者と在宅被災者が長い行列を作っていた。
- △約 800 km離れた県から来てくれた支援職員に、支援期間中トイレ掃除だけをさせていた。
- △要介護者の面倒を保健師さんが、つきっきりで実施しており疲労困憊していた。
- △到着した支援物資を我先にと奪い合うように、箱ごと、パックごと大量に自宅に持ち帰っていた。また1日3回受け取りに来る住民も居た。その際「今日は収穫が無いね。」などと、全国から物資輸送支援に来た職員や自衛官の前でつぶやき、地区の評判を大きく落としていた。
- △医療関係者や支援職員等が避難者を構い過ぎて、余計避難者のストレスが溜まっていた。

➤ 避難所運営の教訓

✓ 普段から自治会活動が盛んな地区の避難所は、雰囲気も良く、運営状況は良好

✓ 行政に頼らず、自然にリーダーが出てくるような避難所は、よくまとまる。

✓ 支援職員が多い避難所ほど、自治意識が芽生えず、運営がうまくいかない。

✓ 避難所担当職員は全般をよく見て、役所等との連絡調整役として勤務するのが適切

➤ 避難者と担当職員が認識を統一しておくべき事項

◇ 避難所は、必要最低限の生活を支援する施設

災害時は限られたスペース・物資での避難所運営となる。避難者の要望すべてに応じることが困難

◇ 避難所は、避難者受け入れの一時的な施設

学校であれば児童・生徒の学び舎であるように、避難所となる施設には本来別の用途がある。避難者の受け入れは一時的なものであり、施設本来の用途の回復を進めなければならない。

◇ 復旧・復興のために

避難所を担当している職員の本来業務は、避難所を支援している間はストップしている。行政職員を早く本来業務に戻してやらないと、復旧・復興がどんどん遅れていく。

◇ 「自助・共助・公助」の連携が重要

災害時は、「自分の身は自分で守る」「地域のことは地域です」という自助・共助の精神を基本とし、行政と協働で避難所を運営する。

※ 本資料は、平成 28 年熊本地震に際し、熊本県内において災害対策本部避難所支援班長として 16 日間勤務した、防災課主幹が自らの体験を元に記述しました。